

## 2009 (H21) 年度 卒業研究要旨

### 「ジェンダー・フリー教育の現状と課題 ー性教育を中心にー」

山本 真梨

私たちには性に縛られず自由に選択し決定する権利がある。にもかかわらず、私たちの言動は「男らしくしろ」「女らしくしろ」と他者から規制されてしまうことがある。なぜか、それは、「ジェンダー」という社会的につくられた目には見えない壁が立ちはだかっているからである。

そもそも根深いジェンダー意識（性別による差別意識）は無意識のうちに浸透し、「男らしく」「女らしく」あることが「当たり前」のことであるとされてしまっている。したがって、「男らしくしろ」「女らしくしろ」と強制されることが、性別による差別の問題であるという認識をできていない人も多い。

これらの現実から打開するための策はすでにとられている。それがジェンダー・フリー教育である。ジェンダー・フリー教育は生物学的性（sex）ではなく社会的・文化的性（gender）の視点から日常生活に潜む固定観念を取り出し、人々の無意識の中に存在する性差別を見直すきっかけを与えた。関係性のジェンダーは変えられるため、既存のジェンダー・フリー教育によって若者の意識が変化したという実績もある。

しかしながら、既存のジェンダー・フリー教育では限界がある。現行のカリキュラムにみると、教育を受ける者は自分が何者であるかを理解し性に縛られずに自己決定をおこなったり、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（後述）を行使したりする権利を有していることが家庭科や保健体育科、性教育で学べていないように思える。そこで私はジェンダー・フリー教育とは何か、また性教育とは何か、それはどのように行われているのか、何が課題であるのかに焦点を当て、本研究を進めた。そしてそのうえで、今後のジェンダー・フリー教育の展望を試みた。

第一章ではジェンダー・フリー教育の概要をまとめた。ジェンダーおよびジェンダー・フリーの定義を行ったうえで、ジェンダー・フリー教育とは生徒たちの中に潜むジェンダー・バイアスや性のステレオタイプを撤廃し、性別に縛られない選択を行える社会を実現することだと論じた。また、第四節では日本におけるジェンダー・フリー教育の実情を把握した。ジェンダー・フリー・バッシングが日本各地で起こっているものの、バッシング派の目をかいくぐりながらジェンダー・フリー教育は学校教育の場、あるいは生涯学習の場においてそれぞれ行われている。学校教育におけるジェンダー・フリー教育は、現代社会科、家庭科、保健体育科、英語科等の既存の教科区分の中で、生徒に少しでもジェンダー意識を認識してもらえるよう、試行錯誤を繰り返しながら行われている。生涯学習もまた、人々にジェンダーの自覚化をうながし、固定観念に疑問を投げかけるパネル展示・講演を行ったり、男性対象の料理教室を開いたり、多種多様なジェンダー・フリー教育を行っている。

第二章ではジェンダー・フリー教育の中でも性教育に焦点を当て、性教育の意義・実情について論じた。性教育がジェンダー・フリー教育の中核をなすと考えたからである。まずジェンダー・フリー教育の一部である性教育に焦点を当てる理由を述べ、ジェンダー・フリー教育の中に占める性教育の意味と位置づけを明確にした。次に日本における性教育の実情

を述べ、学習指導要領を参照しながら現在の性教育の内容を整理し、学生調査をもとに性教育の実情を把握・分析した。学習指導要領によれば、性教育を行う意味としては、「自己の体や性に対する知識を軸に、自分の体への理解を獲得すること」「商業・差別・暴力的な性情報に対し、批判的な考えを抱けるようになること」「責任ある自己決定を行えること」などが挙げられている。これはリプロダクティブ・ヘルス/ライツにほかならず、性教育で学んだ姿勢はジェンダー・フリー教育に通じるものである。しかしながら、実際の教育現場でもジェンダー要素が含まれずに性教育が行われているのかと聞かれたら不安を覚える。学習指導要領に則って授業は考えられているが、どれほど依拠した内容、ジェンダー・バイアスを含まない内容となっているかは学校それぞれである。すべての担当教師が注意を払っているとは思えず、どの学校でもジェンダー・フリー教育が成立しているとは言いがたい。現在日本では学習指導要領に基づいて全国で性教育が行われているが、ジェンダー・フリー教育の観点から見ると、不安の拭えない内容となっているのではないだろうか。このことから、ジェンダー・フリー教育の一環として性教育を進めていくためには改善すべき点があることが明らかとなった。日本と同様な性教育実践を行っているアメリカのケースと、ジェンダー・フリー教育としての性教育実践が進むスウェーデンのケースを紹介しながら、結婚まで禁欲教育と包括的性教育の比較を行い、若者のためにもジェンダー・フリー教育のためにも包括的性教育が必要であることを論じた。

第三章ではジェンダー・フリー・バッシングの動向を追った。現在ジェンダー・フリー教育および性教育が十分に展開されない背景の一つには、ジェンダー・フリー・バッシング派の存在がある。一部の議員やその流れを汲んだ行政の影響力は大きく、ジェンダー・フリー教育を進めていくうえで無視できない状況に陥っている。ジェンダー・フリー・バッシングの経緯を年代順に追い、なぜ近年になってバッシングが広まったのか都立七生養護学校のケースを挙げて考察した。最後にバッシング派の主張に論理的根拠がないことを示し、ジェンダー・フリー・バッシング派の主張の問題点をまとめた。

以上の流れを受け、第四章では今若者が求めているジェンダー・フリー教育を考察した。現在行われているジェンダー・フリー教育により若者の意識は以前よりも固定的なジェンダー意識から自由になっていることが分かった。学生調査の結果から、「男性的」とされてきた分野や領域で女性が活躍することに対する障壁が低くなっていることは明らかである。しかし一方で、「女性的」とされている分野や領域に男性が進出することに対する障壁はいまだに高いことも明らかとなった。つまり、現在のジェンダー・フリー教育は、新たなジェンダー・フリー教育へと発展する必要があることが判明した。若い世代が求めるジェンダー・フリー教育は、若者が自身のジェンダー意識に気付き、固定観念を払拭する教育であると本研究では結論付けた。

ジェンダー・フリー教育は、バッシングが起こっている厳しい状況の中でも注意深く行われてきた教育実践である。それでも固定観念やバッシング派の影響力の方が大きく、人々の意識を変えきれてはいない。戦後の男性像・女性像を理想とし「古きよき日本」を復活させるべきだと主張している人、「女らしい」「男らしい」という性のステレオタイプに縛られ「その人らしさ」を否定してしまう人、そもそも性差別があることにさえ気付いていない人が、日本には少なからずいる。そのためジェンダー・フリー教育は、既存のものから一歩進んだ新しいジェンダー・フリー教育へと展開する必要がある。